

## 平成19年度 第3回高知県人権教育推進協議会まとめ

日時：平成20年2月12日（火）

13時30分～16時40分

場所：高知共済会館3階 金鷄

### 1 児童虐待の防止のために

虐待については、結果論で現場を責めることでは今後の問題とつながらないのではないかと思う。親子関係が戻らないと解決にはならない。児童相談所、学校は厳しい判断をしていかなければならない。教育委員会がそこに積極的な支援が行えたか。そこに反省点がある。

どうして一歩踏み込めなかったのか。行政の縦割りの問題、責任の所在、ネットワークなどの問題がある。

亡くなった児童の書いた詩を読んだとき、涙が流れた。行政の至らなさを痛感している。教育は学校・保護者・地域の連携なしにはできない。都市化の進行により、地域のつながりが崩壊するなど課題も増えている。就学援助認定の書類を見ると、しんどい家庭の子が良くがんばって学校に来てくれていると感じた。校長には、認定申請をしている家庭について、一層理解を深めるようお願いしてきた。近年離婚が増え母子家庭や都市部からの転入の申請が増えている。「子どもは悪くない」といつも思う。教職員の教育委員会に対する認識に距離があったことが、大きな反省点である。

もう一つは、家庭の在り方、特に母親の子どもに対する在り方へのかかわりについて、教職員を支援し連携を取りながら進めてもらうように引き継ぎをした。

児童相談所に相談したが保護してもらえなかったことがある。学校と校長は日々見ているので、これはいけないと感じたときには、緊急に対応してほしい。学校・児童相談所・警察の権限を具体的に明らかにしてほしい。保護家庭の場合には、お金のこともあり子どもを離すことを承諾しないこともある。学校は保護してもらいたい、児童相談所は親の同意がなければ保護できないので、警察に、となってしまう。児童相談所をもう一つ設置してほしい。2人同時に保護が必要なとき、同じ場所では教育上困ることや定員一杯で保護できないと言われたこともある。児童相談所の職員は専門的な方を配置してほしい。県に対してだが、こども課とどのような対応をするのかを明らかにすべきでは？相談や連携が曖昧なところがある。なぜ虐待に至ったかを分析するとき、加害者の生育歴も見ていく必要があるのではないか。

人権感覚が欠如している。児童相談所の責任放棄である。警察にしてもそうである。プライバシーの問題もあるが、民生委員もなかなか家庭に入れない。それでも、命を守ろうとする気持ちが必要。本当に命の大切さ、人権の大切さを関考えた取組が必要だ。

マニュアル化が言われるが、ケースバイケースで、身体を張ってやるべきである。それが人権感覚であり、きれい事ではなく、いかんことはいかん、いいことはいいという対応が必要だ。

児童相談所が一杯で対応できなかったことについては児童相談所に確認をし、児童相談所をもう一つつくることは提案をしていく。職員の専門性の向上は同感。教員2名を派遣しているが、教員増がいいのかは検討が必要。こども課は、児童相談所を所管する所だが、個々具体のケースについて指揮、監督を持てるとは思えない。臨時教育長会では、小さなサインを見逃さないように、学校の限界を超えるような事例についてはすぐに教育委員会にあげてほしいという提案があった。南国市には虐待の件数であげられていたが、実態があげられていなかった。これが問題である。また子どもの命にウエイトを置き、最悪の状況を念頭におくことが確認された。

子どもを保護するにはタイミングが大事だ。それを逃すと、子どもは行く気がなくなる。児童相談所は、教師の言うことをどれだけ重要視してくれているのかに問題がある。学校も隣近所へ足も運び、民生委員や地域の人に虐待への対応をもっとお願いをするべきだ。

虐待防止法で、教職員は児童生徒が虐待を受けているのを把握し、通告する義務がある。親権を果たせない場合は、親権の一時停止をすることが出来る。今回ネグレクトの認定で終わったため、その他の虐待の事実が目が向かなかつたのではないか？非行の多くは、虐待を受けている子どもた

ちであると言われている。DV や自殺、虐待へ、様々な対策が取られているのに、根底を考えるとの大切さが顧みられていないのではないか？

## 2 いじめ不登校を生じさせないための取組のまとめ

会合は今回で5回目であり、最後になる。これまでの意見集約を予防的な視点に限定して事務局がまとめさせてもらっている。

学校の努力には限界がある。子どもが荒れるときの背景には必ず不況があり、部落の子どもにその影響が真っ先にあらわれた。教員としての無力感をかみしめた。学力の問題において、一人の子どもが2ヶ月ぐらいで学力が急上昇したが、当時その地域は行商を中心としており、しばらく留守にしていた母親が家に帰ってきた時であった。この2つのことを意見集約に入れてほしい。

福祉教育の文言をわかりやすく。学校に来た子どもは、我々が守らなければという誇りを持つべき。不登校の問題は心の問題としてとらえるのではなく、本人の進路の問題としてとらえるべき。同和教育では、家庭訪問で、学力を付けることの必要性、学校の意義を伝えていった。事件が起こると対症的に行っている現状があるが、予防的な取組が必要である。教師が子どもにどのように働きかけるのかについての記述が弱いと思う。今学校の教師が、アイデンティをしっかりと持てるような投げかけの文章がほしい。

大学で教育学を教えているし提起もしてきたが、啓蒙・啓発主義から抜け切れていないところに課題がある。一人一人が自分の問題として力を付けるのが教育であると考えている。その意味ではこの意見集約の文章は、前向きな方向性が見られる。それぞれの部署で、柔軟に深く考えることをやっていくべきだと思う。

二つめとして、私たちはシステムに慣れすぎているのではないか？システムを超える人間づくりができていないところに反省がある。自分の役割によっては遠慮することがあるが、それはシステムに取り込まれている状態であり、一人一人が物差しを持ち、システムを超えることがないと、役割分担論で終わるように感じる。行政で働く者の方向性をしっかりと示すべきでは？

柔軟性は、前文で入れると良い。全県的な取組が必要。枠を超えた全体的な取り組みの必要性について文言を入れてはどうか。

自殺対策のキーワードでは、優しさとつながりである。子どもには希望を、教師は次代を担う子どもを自分たちがつくっているのだという誇りを。保護者にはこの学校に預けていればという安心を持たせるのが同和教育のベースであった。

この意見集約が実行されていれば、高知県の状況は良くなっていると思うが、どこでどのように使われるのか？どのような働きかけが行われるのか？

まとめは市町村の教委から、学校に届け、その他会合、研修等でお知らせし、ホームページでも広げていく。いい意見があれば教えてほしい。

県教委が啓蒙・啓発主義の壁を突破できない、システムを超えられない現状である。学校に送っても読んでくれる人は少ないだろう。それを土佐の教育改革を進める中で強く感じてきた。

問題意識を持ってしていく。それを理解していただきたい。

読んでもらうためにはわかりやすくすべき。「学級開き」や「構成的グループエンカウンター」などの言葉は一般の人にはわかりにくい。「Q-U」も同様。もう一度読み直して検討すべき。前回までの意見などを、そのまま出してはどうかと思う。「いじめの傍観者を出さない学級づくり」などの語を出すべき。6番の保護者地域の連携では、不登校から学校に戻ることが目的ではなく、子どもの選択肢を広げていくことが社会的自立につながることを入れてはどうか。いじめや不登校が見つかったとき、よく気付いたと言える環境づくりが必要。迷わず行動に出る勇気を持つことを述べてほしいのでは？

何かしなければ変えていくことはできない。かかわる仕組みを根本的に変えていくべき。来年度からは学校と委員会で決めて準要保護の認定をするという話が出たが、民生委員さんたちから個人

情報保護の名の下に具体的な情報共有ができなくなるのは良くないとの反対意見があった。みんながかかわる場を大切にしていける必要があると思う。課題解決力が弱く、子ども同士でトラブルを解決できない。友だちの対応が変わると不安になる子どもが多い。

家庭地域のところにぜひ民生児童委員の文言を入れてほしい。

「孤立した保護者」という言葉を入れてはどうか。事件の母親がその状況である。孤立状態がわかっているならば、地域で誰かが声を掛けることができたのではないかと。

### 3 高知県の子どもたちを育てるうえで大切にしたいもの

今回の全国学力調査の結果で高知県は低く、見通す力、判断する力、物事をきちんとわかるように学校で、学力を上げていかなければならない。施策を国や教育委員会からではなく、学校から案を出させ、予算をつけるとよい。非行と低学力は自分自身に負けた姿と言ってきたが、自分たちが教えた子どもが大人になっている。

カウンセリング例で、虐待をする人は、つらい幼少期の自分と同じような子どもを見るのが嫌で、虐待を行っている例が多い。不幸の連鎖をどこで絶ちきるか。こうした課題のある親は学校とつながっていない。自分もいじめっ子であり、不登校であったため、学校を信じられないという意識があり、周りから批判されることをとても恐れている。やっていることはいけないが、この人は悪くない、この人もつらいんだなどの意識で会っている。民生委員さんなどがチームを組み関わっている。助けてあげるではなくさせてもらえる、相手と同じか少し下の目線で行かなければならない。加害者の父親をかばうわけではないが、この父親も不幸を背負っている。高知県では、体罰が非常に多いように思う。厳しくやることを学んできた先生は、体罰を中心とする。体罰を受けた子どもは、大人になったとき攻撃的、反社会的、心理的な病気になりやすい、社会性が育ちにくいことなどを話すようにしている。

高等学校には柔軟性がないように思う。留年、中退をし、ニートにならざるをえない生徒がいる。発達障害などで別室登校しても、出席扱いにせず、単位を与えない学校や先生がいる。

高等学校は、発達障害への認識不足がある。その子の頑張りをどのように評価するのがポイントである。場面の見通しを与えることが大事だが、学校の見通しが一番悪いと言われた。教室の配置など場所がわからないことが不安だと言われた。玄関に案内板はあるが、外来者用で生徒は見ない。自校の環境を見直すきっかけとなった。環境というベースの部分に配慮が抜かっていたことに気付いた。自分たちはできていると考えているが、できていないことがいかに多いことか。

土佐の教育改革では、情報公開、学校を開くことが言われてきた。地域・保護者に学校の情報を十分伝えているか。嫌なことは外に出したくないというのは学校も同じではないかと思う。学校を開くと言うことは、自分たちの手に負えないことを外に出すことが必要である。子どもを主人公としたとき、これがどれだけできているか？

学校と保護者との信頼関係がポイントであると思う。信頼関係がないと、何の心配もない情報さえ学校側がバリアを張ることもある。保護者と気持ちを楽にして話し合える関係性をどう築くにかかっている。

学力と生きる力、子どもの人権とどちらが先かという議論がでた。ある人は学力が付けば人権感覚が育つと言ったがわたしは逆だと言った。進学力だけが学力ではないと言った。どちらの学力が必要なのか確認し合うべきではないか。

人権教育の確立が必要。やろうと思えば学力はいつでも可。自尊感情を持ち自分に自信を持つことが必要。しっかりと子どもに向かい合っていくことが大切であると考えている。土佐の教育改革という立派な冊子が出たが、読んでいる人は少ない。冊子やこの意見集約も人権研修で効果的に活用する在り方を探してほしい。

学校に10年行けてなくても今しっかりできている人もいる。愛情欲求を満たさないとその先はない。基本的欲求が満たされると高次の自己実現の欲求が生まれてくる。学校はすぐに勉強、勉強

と言いたくなるが、強制的に行うことは子どもに負担を掛ける。気持ちを安定させることが先決である。子どもはプロセスを大切にしないと、自立した大人にはなっていけない。

結果を求めすぎることが、学校を閉鎖的にし、家庭も閉鎖的にしている。学力か、人権感覚どちらが先とは言えない。両者の関係をどう考えるか。学力とは何かについて論争することが必要。まさに大人にもプロセスが必要。

教育予算をいかに確保するかがポイント。それができる議員を選ぶ必要がある。もう一つは、教師の社会認識力をつけ、親が心を開く先生をつくる。大湊小に行ったとき、学習発表会に行ったが、人権教育が見事に進んでいる。各学年の発達段階に応じた教育が出来ていた。教職員は本当によくやっている。子どもという希望は輝いている。教育長には自信を持ってもらいたい。

心が満たされていないと勉強には向かえない。一番子どもが長くいるのは学級。かかわり合う、認め合う、高め合う学級にすることが必要。学力は高いといっても、塾でやらされている子どもは自分で勉強が出来ていない。そうでない子が力を伸ばしてきた。自分でコツコツやるのが大切であると言っていた。朝読書が広がったが、本格的な本好きの子どもは少ないと思う。読書から学ぶことは多いと思うが、学校には本が少ない。

同和教育に出会うまでは勉強が出来る子どもがよい思っていた。自分の子は心の元気な子にしたいと思った。自分が追い込まれたときにも、心を奮い立たせる力、誰かに勇気を与えることが出来る子どもを育てたい。大事なことは、保護者や学校がその時々判断、認識がきちんと出来ること。子どもを守る機関、動ける環境整備が必要。学校と地域の日常的なつながりが必要。予防の意味で地域の力を借りることが必要。そのための具体的な方策を採る必要がある。

県教委へのお願いだが、人権感覚を高めるためにも、人権教育をしっかりと取り組まれるよう、積極的な姿勢を期待する。先生の感覚・感性を高めるための研修を確立してほしい。

2年前にかかわった児童のケース。私は子どもを引き取り、地域の有志とだけでその家庭を支えようとした。教育委員会にも相談したが、支援してもらえなかった。地域でやってみようと思ったとき、どこで誰がサポートしてくれるのか不安を感じる。

若者サポートステーションの受付登録者120名。ほとんどがいじめを受けている。そして不登校から引きこもりを経験している。親や先生を恨んで、大人は誰も信じられないという。いじめが起きる背景を考えていかなければならない。いじめる子の側へのアプローチが必要。

就学前の段階や出産前の段階からサポートするシステムを作してほしい。郡部の方にもそんな手をさしのべてほしい。

集会所に集まってくる子どもの背景、しんどさが見えてくる。声を掛けるお隣さんや世話を焼こうとする人がいない状況が寂しさを生み出す。子どもの居場所というが、大人にも居場所が必要であり、母親にも必要である。自分の本音が出せるような場がなければダメだ。ここで集められた意見をしっかりと届けてほしい。

子どもの居場所や権利を守っていくために「高知県子ども条例」を読み直したい。子どもを育てる親世代がどのような課題を抱えているのかを知る必要がある。人権教育を意識できずに育つ世代もある。子どもとのかかわりの中で子どもの権利を侵害していることに気付いていないのではないか。悩んでいる30代40代を支援する方策も考えてほしい。

親の意識改革を図っていく必要がある。人権教育で大切にしなければいけない点が、同和教育の歴史をさかのぼったときに遺産、教材がある。教育環境が悪い中で地域とつながりながら先生が学んできた感性、思いを若い先生にも伝える必要がある。教育改革が入り口論となっはいけない。「良い」の価値観も時代によって変わっている。

今の社会では子どもの人権を大切に出来ない現実がある。自分を大切にし、人も大切にできる子どもをどう育てていくか、周りの人と手を結んで仕事をしていくなど、仕事のやり方の変革が必要。